

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：34409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380720

研究課題名(和文)大相撲における力士の身体とその表象について現象学的身体論からの研究

研究課題名(英文)The Body and Representation of Sumo Wrestler from Phenomenology

研究代表者

川野 佐江子(KAWANO, Saeko)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：60582632

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間全体を通じて、研究目的 ～ は、次のような成果を得ることができた。力士たちは「相撲美」という様式美に自己を依拠させることで、アイデンティティを確立していたことが分かった。現代の力士の「稽古」はトレーニングの意図を中心に展開されており、体脂肪率や栄養管理など筋肉を中心とした西欧的身体へとまなざしが移行していることが分かった。主に横綱柏戸を例に考察した結果、「アイデンティティ確立への要請」や「剛健であること」が近代的男性性と結びつくことが議論できた。本研究では、相撲研究が現代社会の諸問題、とりわけ現代の男性が抱える問題にまで展開できることを示したことが、新たな成果としてあげられる。

研究成果の概要(英文)： Sumo wrestler's identity is made by traditional forms that is Sumo Beauty. Now, "Keiko" is modern training for the present sumo wrestler. He is no longer mere fat-man. He aim muscle beauty body. Sumo wrestler's body be connected with modern masculinity, that is big, tall, heavy, and so on. New result from this research is that sumo study can expand to contemporary social studies, especially mens studies.

研究分野：社会学

キーワード：身体 相撲 男性性

1. 研究開始当初の背景

(1)日本の“国技”と称される力士の身体は、“伝統”“格”を表象しなければならない存在に置かれている。そして、西欧的審美性から見れば、その肉体は近代以前の姿である鬚を結い、なによりも肥満の体型をあえて目指すのが相撲である。しかし、この力士の身体性に複雑なアイデンティティの問題と現代日本社会の諸相を見ることができないかと考えるようになった。

(2)一つの身体に、「スポーツ制度や商業的興行という近代的なもの」と「神事や伝統芸能という近代的でないもの」が同時に存在しており、それが力士にとっては日常なのである。鬚とその肉体を有するものは、誰が見ても常に力士なのである。より見られることを意識しなければならない身体を有するのが力士であり、そのことは視覚中心社会と言われる現代社会において、「見られる自己」が強調された存在と言えるだろう。つまり、自己認識の問題について私たち自身の身体性を検討する上で、むしろ恰好のテーマが力士の身体である。

2. 研究の目的

(1)大相撲とその力士達が、どのように社会に受容されてきたのかを探る。

(2)そのことによって神事、格闘技、競技、芸能、興業などが幾層にも織り込まれている相撲独特の世界観が、いかに一般社会と折り合いをつけて来たのか、また、力士達の身体はどのように振る舞わざるを得なかったのか(土俵の内、あるいは土俵の外で)、について調査研究する。

(3)とりわけ力士の身体に着目し次の3つを考察する。

近代的美意識とは乖離した肉体についてと、それを作り上げる彼ら自身のアイデンティティ

「伝統」と「現代」が混在した“相撲美”を表象する身体について

われわれが相撲的身体に表象させたいことは何なのか

3. 研究の方法

本研究は、大きく分けて次の3つの方法論を採用する。

(1)文献調査、映像資料からの調査

相撲そのものへの調査のほか、社会学的理論の補完研究と、過去の力士たちの身体性について観察することを目的とする。

(2)相撲と力士に対する参与観察

本場所のほか、相撲部屋での稽古や力士の日々の生活への参与観察である。

(3)力士へのライフストーリー・インタビュー調査

力士を中心に個別にライフストーリーを聞き取るものである。現在、江東区にある高田

川部屋において参与観察を継続しており、力士にも継続的にインタビューを行っている。その他、柏戸閣の実兄や友人へのインタビューも行った。

4. 研究成果

主に次の4つについて報告する。

(1)力士たちは「相撲美」という様式美に自己を依拠させることで、アイデンティティを確立していたことが明らかになった。

相撲部屋への参与観察と力士へのライフストーリー・インタビューから、相撲という階級社会における力士自身のアイデンティティと、その表象である「よそおい」との関係について考察した。男性性が強調される力士の身体性に、彼等がひとりの個人として何を表象したいのか、それは特殊と見なされる角界においてこそ欲望される「個」としてのアイデンティティと言えるのか、などについて考察した。その結果、番付や「伝統」という拘束が、力士たちの行動や嗜好を制限しており、一般的な若者たちとの比較において不自由さを感じる一方、その拘束がむしろ「相撲美」という力士自身の自尊心を育成していくことになり、その「相撲美」へと自己を依拠させていく様子が考察された。

(2)現代の力士の「稽古」はトレーニングの意図を中心に展開されており、体脂肪率や栄養管理など筋肉を中心とした西欧的身体へとまなざしが移行していることが分かった。

相撲部屋での参与観察や、力士へのインタビュー、文献等での発言を集約すると、身体の鍛錬方法は、従来の四股やテップウという伝統的動作の反復だけでなく、鉄アレイ、バーベル、ラグビー等で使用するタックル用のマットなどが取り入れられていることが分かった。また、土俵での稽古以外で、トレーニングジムへ通う力士は数多く見られ、筋肉を鍛錬することを意識した身体作りが中心となっていることが分かった。これは、師匠と弟子という徒弟関係でなりたつ武道の指導方法が、形骸化しつつあることも示唆している。相撲は、伝統的武道という意味合いよりも、一つのスポーツとして近代的な生体科学などを取り入れた近代的格闘技へと変貌しつつあることが分かる。この背景には、学生相撲出身の力士が増えていることが大きな要因の1つである。

(3)主に横綱柏戸を例に考察した結果、力士の身体は「アイデンティティ確立への要請」や「剛健であること」が近代的男性性と結びつくことが議論できた。

第47代横綱柏戸は、第48代横綱大鵬とともに「柏鵬時代」と呼ばれた高度経済成長期の大相撲人気を牽引した力士である。当時の「剛」の柏戸、「柔」の大鵬という常套句は、柏戸の相撲技術の特徴を肉体的な力業にのみ収斂させ、その後の柏戸表象に当時の

「ヘゲモニックな男性性」を読み取らせることになった。Connellに依拠すれば肉体的パワーは、それだけで「ヘゲモニックな男性性」を支える一つの要素となる。この剛健さ(パワー)の表象がどのようにして柏戸に付与されたのか、なぜ柏戸は「男臭い」と呼ばれたのか。この問を通して「ヘゲモニックな男性性」がどのように構築されるのかを俯瞰することができた。研究方法は、相撲協会の機関誌でもある月刊誌『相撲』に掲載された柏戸の身体表象の変遷を、主に写真を追うことで調査した。(表1.)

表1.本研究用に調査した

『相撲』掲載の柏戸写真ページ数

番付の区分 (1956~70年:15年間)	閲覧ページ数
三段目~十両 (富樫時代)	60
幕内~大関	410
横綱	676
合計	1,146

この変遷を追うと、初々しい青年に徐々に成熟した男性性が強調されていくことが明らかになった。(図1、図2.)

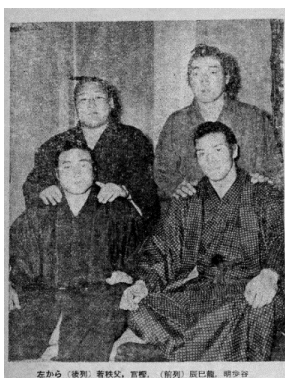


図1.『相撲』1956年 初掲載(右奥)17歳

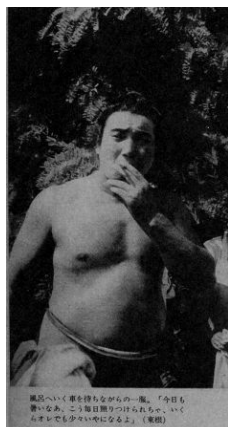


図2.『相撲』1960年9月号 柏戸

このことは、少年が心身ともに成熟した男になった、と言う成長物語ではなく、柏戸がその社会からの要請である「ヘゲモニックな男性性」に対し、どのように応えていったかということの変遷を俯瞰させるものとなるのである。したがって「柏戸の表象」は、力士としての彼を表象する一方、個人としての彼自身を覆い隠す仮面にもなっていることが明らかになった。彼が「ヘゲモニックな男性性」に対してどのような態度であったのかは、「男性性とアイデンティティ」の問題として今後明らかにしていきたい。

(4)本研究では、相撲研究が現代社会の諸問題、とりわけ現代の男性が抱える問題にまで展開できることを示したことが、新たな成果としてあげられる。

力士の身体は、力士であるべくふるまわれるものである。相撲が神事やスポーツや芸能や興行などといったさまざまな側面をもっているために、そこに生きる力士たちは、その都度さまざまな身体として振る舞わなければならない。神の使いとして、闘う男の中の男として、巧みな技や尋常でない力の持ち主として、それらの総体としての美的な存在として、人びとの期待に応えなくてはならない。力士に期待する人びとの思いは、メディアによってパターン化されて、力士の身体性に表象される。それは、個としての力士が社会とつながる瞬間でもあり、その逆にひとりの個人が「力士」という総体とつながる瞬間でもある。そのつながりのさきに、個としての力士とひとりの個人とがつながる瞬間もあるだろう。身体は個的でありかつ社会的なものなのである。

特に、力と階級制度に生きる力士たちは、そのまま現代の男性の在り方の縮図であり、肉体を駆使せざるをえない生活は、身体の近代化や商品化という消費社会の問題も含んでいる。また徒弟制度を中心とした部屋制度は、家族論や若者論にも通底する問題を抱えている。相撲研究から、社会の問題を提示出来ることを示せたのは、大きな成果の1つである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

川野佐江子、「男らしさ」と横綱柏戸の表象 柏戸の何が男性的なのか、スポーツとジェンダー研究、査読有、2016年、14巻、33-42p

川野佐江子、大相撲とその力士の身体表象に関する研究 NHK テレビ番組で描かれる力士の身体性について、大阪樟蔭女子大学研究紀要、査読無、2014年、4巻、77-88p
<http://id.nii.ac.jp/1072/00003872/>

〔学会発表〕(計 2件)

川野佐江子、力士の顔と表象 横綱柏戸の顔の変遷と「柏戸」イメージの構築、日本顔学会、2015年9月13日、「中京大学(愛知県・名古屋市)」

川野佐江子、大相撲力士の身体表象に関する研究 構築され消費される男性性と「横綱柏戸」、日本スポーツ社会学会、2015年3月23日、「関西大学(大阪府・堺市)」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川野 佐江子(KAWANO, Saeko)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：60582632

(2) 研究分担者

なし